

## 演出家・関口存男 新劇の水脈としての踏路社



(1)

関口 純

1917年2月23日～24日、ところは島村抱月と松井須磨子の愛の巣として名高い芸術俱楽部。無名の若者たちの手により、長与善郎の戯曲「画家とその弟子」が上演された。これが踏路社の誕生である。多くの方は、無名の若者が歴史的大スター松井須磨子のお膝元、しかも芸術俱楽部などという大層な名前の劇場で旗揚げ公演をするなんぞ「やはり才能あるひとたちは他人が放っておかないなあ」などと思われるかもしれないが、この芸術俱楽部、実際のところは使用料が8円とお安い畳敷きの小劇場（板張りにしての使用も可能な可動式）。公演中など、部屋の外から割烹着姿の松井須磨子が覗いているという長閑な世界。当時、上智大学とアテネ・フランスに在学中（所謂ダブルスクール）だった曾祖父・存男は、まだ赤ん坊だった祖母・充子（存男長女）をおぶって稽古に通ったりもしたそうだが、「学生さん、学生さん」と声をかけられると、天下の松井須磨子が祖母の襤褓を取り替えてくれたという。存男の盟友・青山杉作氏の娘さんは祖母よりも年長であるが、やはり松井須磨子に遊んでもらったという。まあ、全てがこんな調子…良い時代である。

じゃあ、長閑な時代のアマチュア演劇のお話に過ぎないのかというと、そこで収まりきらないところに踏路社を語る意味があると言つていい。またそのコンテクストに於いて関口存男を語ることは、関口存男を理解する上で欠かせないばかりか、現在の新劇に於ける水脈を考える上でも重要な問題を含んでいると言わざるを得ない。

この踏路社なる劇団、築地小劇場～俳優座と新劇の発展に偉大な足跡を残した俳優・演出家であるばかりか、数々の名優を育てた青山杉作。若くして亡くなってしまったのが惜しまれるが、日本で最初の巨匠映画監督などとも称される村田實。宝塚歌劇のレビューを創ったとも言われる、かの「モン・パリ」で有名な岸田辰彌。日本の演技芸術（この文脈では敢えてこう呼びたい）に、それはまるでプリズムの様に各方向へとそれぞれの仕方で影響（方向性）を与えた偉大なる人物たちを多数輩出した稀有な劇団だ。まあ、その顔ぶれを見れば「なるほど、それは重要な違いはない。納得！」である。だとすれば、その中でドイツ語学者の関口存男が何をしていたのか、何を残したのかに興味が持たれるところだ。普通に考えれば戯曲の翻訳でもしていたのだろうと考えるのが妥当である。だが、踏路社私演（本公演の様なものと考えて良い）で存男が翻訳した作品は一つも無い。定期会員を集める際の予定演目では関口存男訳という文字を見つけることが出来る。だが実際のところ、野上豊一郎訳、山本有三訳、森鷗外訳が使用されており、私演に関する限り、存男自身が舞台監督（現在の舞台監督ではなく、演出の意）を担当する際にも、他人の翻訳を上演台本として使用している。それでは何をしていたかなのだが、ここで青山杉作氏と踏路社幹事の木村修吉郎氏（その後、自身も作家として作品を発表するとともに、武者小路実篤が主宰した雑誌「心」の編集長を務めた）の発言を抜粋・引用してみたい。

「関口君を中心に演目を決めて研究するようになった。外国の演劇運動について知識の深い関口君から、われわれは大いに啓発される所があった。そして、そうしているうちに、新たに創られようとするわれわれの劇団は、ドイツの室内劇運動に範をとろうということに決まっていた」—青山杉作（『青山杉作』青山杉作追悼記念刊行会、1957）

「実をいうと、初め私はいさかの危惧を感じたのです。私達は駆け出しながら役者の端くれであるが、果たして素人芝居の関口君に演出をやって貰つていいか何うか危ぶんだのです。が、さて稽古が始まると、関口君は非常に熱心で、役者達に遠慮会釈なく、此處の動きはかう、此處の科白はかう、玄人である役者達を、素っ裸の素人が素っ裸の調子で稽古をつける。しかも芝居の動きが自由で、会話にもユーモアがあり、私は上手な演出だと思いました。これは誰の目にもさう映つた」—木村修吉郎（『関口存男の生涯と業績』三修社、1959）

青山氏の証言にある様に、この時期の存男はラインハルトの室内劇場とカール・ハーゲマンの論考に熱心だった。我が家にはヤコブソンによるラインハルトの「幽霊」（イプセン作）の評論を訳したものが残されている。この時期のものである。ハーゲマンに関しては、踏路社発足の前年、年末差し迫るクリスマス直前の12月22日・23日両日、黒田次雄名義で銀座のミカド俱楽部に於いて講演までしている。ちなみに余談だが、この怪しげな名の劇場（?）らしき謎の空間で山本有三氏と出会うことになる。このミカド俱楽部、踏路社に稽古場を無償で提供していたらしく、そのお礼にミカド俱楽部の会員向けに、存男訳のラビッシュ作「色気ばかりは…」等を上演した記録が残されている。プログラムには踏路社訳となっているが、もちろん実際のところは存男訳で、踏路社第一回私演の前年、東中野にある友人・松永津志馬のアトリエで上演する素人芝居の為に用意されたものだ。母・久美子（存男の孫。存男長女・充子の娘）は存男本人から「若い頃、東中野でカーテンを吊って芝居をしていた」と聞かされたと言うが、どうやらそれがこの素人芝居のことらしい。存男の役者デビューもこの時である。そして、この素人芝居に村田實が演技指導に来たことから、存男が踏路社に参加する道筋が出来たという訳である。踏路社に誘ったのは村田實その人だったからである。大正5年12月3日の日記に「村田さんが来た。そして文学や劇の事に就て熱心に話して帰つて行った。劇の事に関して私もすっかり興奮てしまひ、村田さんの真剣な態度に感服した。そして益々着実な態度で一生の仕事を始めようと心に誓つたのであった」とあり、翌4日の日記には「村田さんが来て、踏路社の計画や私の任務について種々話をした」とある。では、この「私の任務」とは何であろうか？ それこそ舞台監督、今で言う「演出」だったのである。その辺りの事情は上記、木村修吉郎の証言に詳しい。長田秀雄の劇評もだが、田中栄三編著『明治大正新劇史資料』に記されているところによれば、踏路社第一回私演「画家とその弟子」を田中栄三と並んで観ていた上山草人は「うーむ、こりゃ真物だ」と唸っていたと言う。その演出家こそ黒田次雄=関口存男その人だったのである。新劇自体は明治期から存在するが、踏路社を「現在の形での新劇」の始まりと考える説は少なくない。むしろある意味、定番の説かもしれない。存男自身も「その前には何一つ世間に名を出すようなことをやつたためしのない青二才が（中略）築地小劇場から今日の新劇までに至る、いわゆる『新劇』のタイプをはっきりと打ち出してしまったのである。こんなことを言うと、坪内逍遙派の諸団体の人たちや、小山内薰の関係していた諸流に属する人たちは、何を生意気ぬかすか、新劇というのはおれたちがはじめたものだ、おまえたちはずっと後だった、とおっしゃるかも知れない。しかしそれは『新劇』という名称のことだと思う。現在やっている通りの新劇の芸風、せりふ、脚本のえらび方、理想、演出方、その他とにかくインテリ層と深く結びついた行き方の芝居は、たしかに踏路社運動がそのはっきりとした皮切りで、その後例の築地小劇場を経て今日に及んだのである」（前掲『青山杉作』）と書き残している。そうだとするならば、関口存男は「現在の形での新劇」、延いては日本の現代劇（西洋演劇）に於ける、最初の本格的な演出家と言つても過言ではない。その演出ぶりについては先に引用した木村修吉郎の証言から察することが出来る。